大正國語讀本 修正版 卷三

375.9
H019
資料室

42015
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2239

資料室
375.9
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編 修正版

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大学 教 38327

大正國語讀本（修正版）卷三

目次

一 畝傍紀行……落合直文……一
二 四季（韻文）……清水濱臣……六
三 勿來關……熊田葦城……八
四 日本人の風雅……德富猪一郎……一二
五 讀書の經驗……（修養）……一五
六 綠陰幽草……仲小路廉……二〇
七 潮の岬……杉村廣太郎……二五
八 生存競爭……丘淺次郎……三二

九　梧窓漫筆……太田錦城…三九
一〇　天龍川堤防始末書（候文）……金原明善…四四
一一　朝鮮雜觀　その一……芳賀矢一…五一
一二　朝鮮雜觀　その二……五七
一三　八道の山（韻文）……大町桂月…六三
一四　札幌農園……菊地幽芳…六五
一五　イートン校……（頬杖つきて）…七二
一六　英佛獨の國民性……和田垣謙三…八〇
一七　水の都……（ヴエニスとフロレンス）…八三
一八　蜀山人の盆燈籠……饗庭篁村…九一
一九　我が家の經濟……福澤諭吉…九九

二〇　伊達正宗の國入り……新井白石…一〇四
二一　江川坦庵……井口丑二…一一一
二二　青葉の笛……大町桂月…一一七
二三　うれしさ……幸田露伴…一二二
二四　學問の趣味……澤柳政太郎…一二七
二五　明倫の歌（韻文）……（明倫歌集）…一三三
二六　臺灣より（候文）……乃木希典…一三七
二七　トラファルガルの海戰　その一……小笠原長生…一四一
二八　トラファルガルの海戰　その二……一四八

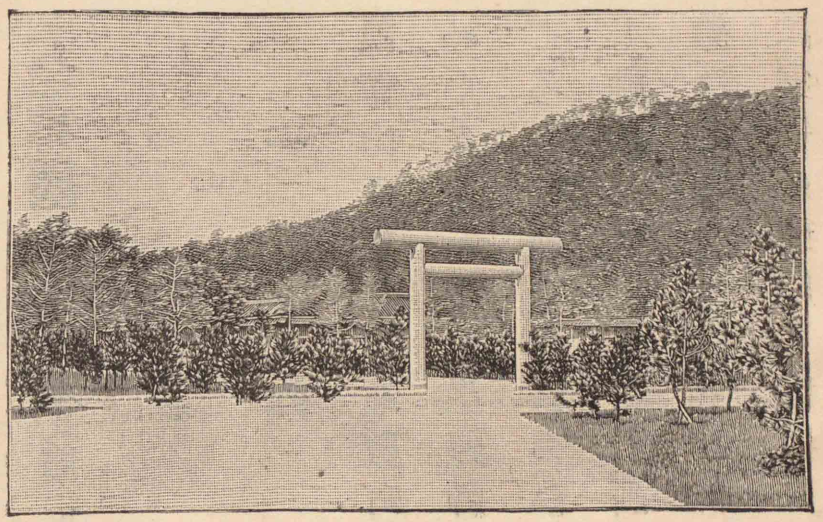
廣島大學圖書之印

大正國語讀本（修正版）卷三

落合直文

一　畝傍紀行

畝傍山の東北の地、數町をトして、瑞籬いと貴く結びめぐらしたるは、皇祖神武天皇の御陵なり。我等旅ごろもの塵うちはらひて御前に額づく。思ふ、むかし神武天皇、天祖の遺訓を奉じて此處に皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆ど三千年、君臣の分明かに父子の親厚く、世界にたぐひなき此の一大帝國を



畝傍山と橿原神宮

成し給へり。我等此の國に生れ此の君の御流を奉じて、此の土に生育するものゝ、いかでか限りなき感慨胸に溢れざらむ。をろがみ終りて友の詠める、

古をしのぶ袂にかよひけり畝傍の山のみねの松風

萩の家も暫し空うち眺め

萩の家　落合直文の號。

て、

畏くも額づく袖にちりにけり
畝傍の山の松のしたつゆ

かくてやうくに御前を退く。そもくく中古以來王室おとろへさせたまひてよりは、歴代の帝陵さだかならざるものの多かりしのみか、此の御陵さへほとほと知られざるほどにて、里人は此處をじんむ田などと唱へ居たりとなむ。さるを王政古に復りてより、今はかくめでたくしなさせたまひしかば、何の思ふこともなけれど、なほ隴を得て蜀を望む人情よ

りは、此の畝傍山の全體をことごとく取入れて、瑞籬廣くゆひめぐらされたらむには、伊勢の神宮と相並びて、その尊さも一しほまさり、いかばかり神々しからんなど思ふも愚かなる心なりや。

それより綏靖・安寧二天皇の御陵を拜みて、長谷の方へと志す。耳無山・天香具山右左に見ゆ。古き物語などしのび出でて語り合ふに、いつしか談は今の世の憂き事などにも及びければ、萩の家、

うき事のまこと聞えぬものならば
すみても見まし耳なしの山

夕日西にかたぶきて、風やうくすずし。友、埴安の池のさざなみよる見えて

あきかぜ立ちぬ天の香具山

夜になりて、觀音の前なる宿につきぬ。（萩の家遺稿）

畝傍の陵に詣で給ひて昭憲皇太后の詠ませ給へる御歌

ひろまへに玉ぐしとりてうねび山
高き御稜威を仰ぐ今日かな

二　四　季

清水濱臣

春もなかばはすぎの戸を
おしあけ方に見わたせば
のき端の雲はさくらにて
そぼふる雨こそ香ににほへ

雲間のつきもやどるなり
くひなの聲もしきるなり
たちばな薫るゆふかぜに
いはもるしみづすずしくて

あきふく風のばせを葉に
ふたこゑ三聲おとづれて
まどより西につきかげの
かたぶく見るこそ哀れなれ

ふゆごもりせる雪の夜に
閨のうづみ火かきおこし
炭やくしづがなりはひを
思へばいとこそ身は冷ゆれ

武衡　姓は清原、出羽の豪族。

家衡　清原武衡の甥。

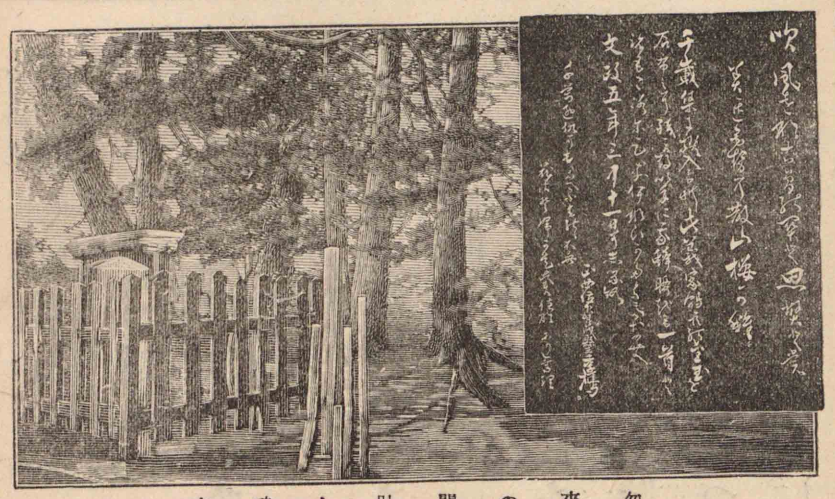
勿來の關　常陸・磐城の國境。

三　勿來關

熊田葦城

武衡既に縛に就き、家衡誅に伏し、其の黨四十八人また斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國内靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑かに渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠悠また戰時の秋に似ず。行きく〳〵て勿來の關へ差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上繽紛として飜るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思へるは散來る櫻、關山春深きところ、心なき身も感などか起らざらん。兵馬倥偬の間に在りては、月を見ても樂しからず、鳥を聞けども嬉しからじ。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、冑も花、鎧も花、身は何時しか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。



勿來の關趾と碑文

吹く風をなこその關と思へども
道もせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭・短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼の地に在りつれば、皆それ〴〵に見候ひなん。是のみこそ羨ましき心地すれ。」と。義家畏りつつ答ふ、「心長閑けく候はんには、床しきことも候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。唯勿來の關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、其の儘にうち過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せて斯くなん仕りぬ。」とて、彼の吹く風の歌を打誦ずれば、「實にも秀歌をこそ致しつれ。」とて、感嘆特に淺からず。花は櫻木、人は武士、斯の人斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。（日本史蹟）

四　日本人の風雅

德富猪一郎

日本人は風雅を尚ぶ、これ國民の性情に出づ。而して風雅を尚ぶと雖も、これに捉へらるるものにあらず。眞に樂しむものなり。風雅を尚ぶは、卽ち餘裕ある國民たることをあらはす。風雅の嗜みは何人にもあり得べく、また何人にもありたきものなり。而して日本國民は、この餘裕ある性情の美を、永久に保持せざるべからず。

世には、風雅人なる者あり。とかく風雅をば我が物とのみ考ふるの癖あり。我が物となすは可なり、だ我が專有にして、人間の共有物たらずとなすは不可なり。世を避けて、山林に幽居し、花鳥風月の外、相手となすべきものなき隱居、若しくは詩歌・俳句・書畫・骨董・茶の湯・挿花・音樂等の技藝、および其の鑑識に長じたる者の如きは、世の所謂風雅の仲間たる特權を有する輩なり。これ或は然るべし。されど風雅の嗜みは、此の外の何人と雖も之を得べし。その共通的なるは、その根源を人の心に置けばなり。

風雅は必ずしも外物に存せず。珍畫名器の裏にありても、遂に風雅の何物たるを解せざるものあり。

苟も心茲に存するあらば、何人も風雅にてあり得べし。*生田の森の戰に、梅花を箙に挿みたる梶原景季を見よ、風雅の風雅たる、それこゝにあらん。

生田の森云々　源平盛衰記卷三十七にあり。

風雅の嗜みは、人の一生をして興味多からしむ。仰いで浮雲の白きを視、俯して百花の紅なるを觀れば、吾人は頓に自己を天地の懷に投ずるの感あり。電氣燈を點ずるは、何處にても自在に爲し得ることにあらず、然も一片の明月、何人かこれを眺むるを禁じ得るものぞ。風雅は貴族的の處にも存す、然も最も多くは平民的の處に存す。

吾人は風雅の嗜みを世に普及せしむること、最も世道人心の改善に於ける要件たるを見る。古代の日本人は風雅に親めり、今人これを疎ずるは善き現象と稱すべからず。（日曜講壇による）

五　讀書の經驗

*僕は北海道に行つてから、多讀の疾に罹つて、農學校の圖書館にある書物を、片はしから讀んで了はうと云ふ無謀な大野心を起した。科學上のものを除いて、歴史・地理・傳記・政治・經濟等、あらゆる方面に亙つて、

僕は云々　新渡戸稻造氏が札幌農學校に入學以來の事なり。

手當り次第に讀破した。併しそれは只一通りの意味を解するまでで、少しの考もなく、目的もなしに讀んだに過ぎない。それでも、讀むは讀むは殆ど淫讀と云ふ位に讀んだ。

多讀の結果は、第一、眼を害して、今日眼鏡なしには書物を讀むことが出來なくなつた。第二、どれこれの差別なしに濫讀したので、頭腦が粗雜に流れて、緻密を缺くやうになつた。第三、種々な說を見たので、自分の定說がなくなつた。例へば或說が起つたとすると、直に其の反對說にはかう云ふことがある。さ

うばかりは言はれないと云ふ考が起り、何れの說に對しても、是非の論が直に起り易くなつた。惡く云へば見識がなくなつた。

多讀は多くの害を與へた、しかし一つの利益をもたらした。それは、書物が早く讀めるやうになつたことである。先輩や同僚が「どうも私は讀書が遲くて困る。參考書を見て、充分に調査しようとしても、時間が乏しいので思ふ樣にならぬ。」と、折々愚痴を言はれる。併し、僕は幸か不幸か多讀したので、自然に早讀の習慣を養ひ、大抵細く組んだ外國語の書物でも、

一頁二分から五分位あれば、讀んで大體の意味を知ることが出來る。　五號活字の四六判形の英書であれば、二分間で讀むことは少しも困難でない。　從つて參考書を讀むにしても、割合に不便を感ずることがない。　多讀は多くの不利益を與へたが、此の點だけは確かに一つの利益であると思つてゐる。

それで、僕は自分の經驗から割出して、青年學生に多讀の利益ある所だけを取つて、害のある所を去る樣に勸めたい。　それにはどうするかと云ふに、一つの標準となる最良の書物を定めて精讀するのである。

即ち充分に精讀する價値のあるものを定め、そしてこの書物を反覆精讀し、表紙の始から、中は勿論、最後の何年出版、何書店發行と云ふ所までも讀破する位の勢で讀むのである。　此の書物の爲に全精力を擧げて讀み、其の他の書物は此の書物の參考又は補助として讀む。　つまり標準書を全然頭腦の中に入れて、他の書物から得た知識は、標準書を中心とした補足の用に供するのである。　例へば論語を標準書としたとすれば、スペンサー*でもミル*でも、總べてこの論語の參考として讀むやうにするといふ意である。

Spencer
Mill

これは多讀を最も有益に應用する方法である。

（新渡戸稻造―「修養」に據る）

六　綠陰幽草

仲小路　廉

「綠陰幽草勝花時」とは、余の常に愛誦して措かざる所である。二月の花は固より艶麗であるが、併しながら綠陰幽草の一しほ落着きのあるには及ばぬと思ふ。人事も亦然り。華々しき所もなくてはならぬが、併しながらたゞそればかりでは、崇高の感じが起らぬ。更に落着きがあり、底力の備はつてゐる所に

こそ、枉ぐべからざる男性的な勇氣も存することと思ふ。

盛なる花を觀る者は多いが、散りての跡を訪ふ者は極めて少い。得意の時に得意がるのは人情の常であるが、失意の際に一段の勇氣を鼓舞する人は甚だ乏しい。併しながら、花は綠陰幽草裡に潛在的勢力を養うてこそ、初めて他日爛漫たる美を現はすことが出來るのである。

余は毎朝夙起、庭園を一週して新鮮なる空氣を吸ひ、時としては綠陰の下に、讀書三昧に入るのであるが、

これを人生の一快樂としてゐる。過日も曉起、庭園を逍遙して、次の一絶を口吟した。

曉起庭園踐露華　翠陰竹徑又叢花
爽涼步々輕翻袂　心暢懷寛何足嗟

綠陰の下、爽涼たる風に吹かれつゝ、手に快心の書籍を繙く程の愉快はあるまい。議政壇上に立つて國事を議するも、亦人生の快事には相違ないが、同時にまた綠陰幽草の下に於て、古今に通ずる書籍を友とするの雅懷をも養ふべきである。

余の老母は今年喜壽の高齡を迎へたので、過日家内で眞に心許りの祝意を表した。

昨日論壇客　今宵廬裡人
秋霜寒肝膽　藹藹侍慈親

是が即ち其の時の吟懷である。議政壇上に立つては、秋霜烈日、人の肝膽を寒からしむる必要もあるが、人生は常にそれ許りでなく、時としては家庭に於て往年の孩提に立歸りて、慈母の膝下に藹々たる情愛を捧ぐるも亦快樂である。これ實に人生に於ける綠陰爽涼の慈味である。

綠陰滋き所に、蕭々たる梅雨を聞く、これほど人心の

落着く時はなく、またこれほど意義深き時はあるまいと思ふ。　生々發育は、宇宙の常道である。　然も此の梅雨の時節、終日蕭々として降る慈雨は、實に生々發育の根源であつて、綠樹薫風は、恰も青年が鬱勃たる潜勢力を、其の胸中に蓄ふるに等しく、慈雨の被る所、如何なるものと雖も鬱々勃々たる氣力を露すのである。　此の蕭々として降る雨あるが爲に、水田悉く漲り、蛙の鳴く音と共に、愈〻挿秧の期となるのである。　また水村山郭到る處に、村孃野童の田植歌を聞くのも此の頃である。　更に雨窓の下、靜かに讀書の妙味を味はひ得るのも此の時節である。

綠樹薫風迎又還　最欣斯節此躬閑
心馳物外無古今　笑殺黄塵客路難

激務多忙の中にも、一日一時の閑を得て、蕭々たる雨窓に古書を繙き、心を物外に馳すれば、全く古今がないのである。　然るに何事であらう、世の多くの人々は、黄塵客路に煩悶苦惱してゐるとは。　英雄の胸中には、また實に此の閑日月あつて欲しいと思ふ。

（綠陰涼語による）

○夏の歌三首

陰ふかむ青葉の櫻若楓
　夏によりても飽かぬ庭かな　（賀茂眞淵）

はらはじな庭の夏草しげればぞ
　露をたづねて風もとひける　（小澤蘆庵）

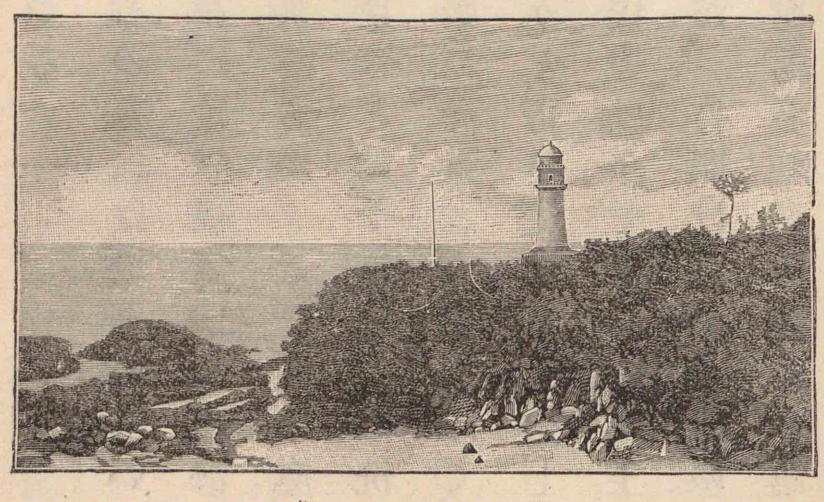
河岸の根白高菅かぜふけば
　波さへよせて涼しきものを　（香川景樹）

七　潮の岬

杉村廣太郎

潮の岬　紀州の最南端。

とかくして、潮*の岬の端へ出た。なだらかな高低の



潮の岬

ついた一面の芝生が、見る目遙かに打ちつづいて、其の間に薊・蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松が、ぽつりぽつりと處々に立つて居て、それに繋いだ牛の姿が如何にも春めかしい。村の少女子が此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑ひ聲が遠くから聞

える。

右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には、無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどうどうと、寄せては返し、返しては寄せてゐる。

僕等は今や日本の本土の最南端の一角に立つたのだ。打開けた太平洋の海面、煙波縹渺として、其の果何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南

California　New Guinae
Los Angeles

は丁度蘭領印度のニューギニーを隔てゝ、濠太剌利の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフオルニア州のロスアンジエルス迄、間を遮る物もない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實此の一角が、卽ち日本と世界との接觸する處なのだから面白い。

まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに海軍

の望樓に至つては、夜となく日となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて傳ふべき處に傳へる。　かく世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來たのは無理もない。　荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。

潮の岬の民は、小さいながらも世界的の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日、四月二十二日、去

年は愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乘出さうとした日、一昨年は丁度今頃、巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎて、*ケント州の櫻・桃・杏・梨今を盛りと咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓でしきりに信號旗が揚る。　それとばかり、友を促して、急いで見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下にすはつて、「信號旗を上げよ下げよ」。と忙しげに指揮してゐる。　となりの無線電信局では、ぱちぱちぱちとけたゝましい音を立てゝ、電信をかけてゐる。

今まで靜まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。（へちまのかは）

八　生存競爭

丘淺次郎

地球上には、各種の動植物をして自由に增加せしむべき餘地はない。そこへ各種の動植物が、多數の子を生むのであるから、互の間に劇しい競爭の起るのは見易い道理であるが、其の有様を詳しく論ずるには、まづ諸生物の生活する有様から考へてかゝらなければならぬ。

動物の中には、獅子・虎・狐・狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛・馬・羊・鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子・虎等の餌となるものは矢張り草を食ふ動物故、動物の食物は、直接にか間接にか必ず植物より取る外はない。又海產の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな工合で、どれもこれも皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮い

て生活する無限の微細藻類を餌にするから、此の場合にも動物の食物の根原は矢張り植物界にある。斯くの如き有樣ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物なしには肉食動物は生きて居られぬ。　草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犧牲に供する積りでなければならず、又他の動物を食はなければ、生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。　草と

草食動物と肉食動物とが相竝んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出來がたい、

長閑かな春の日に、野外に散歩して見ると、草木の青々としげり、花の美しく咲いて居る處に、蝶が面白さうに飛廻り、小鳥が樂しさうに歌つて居る。　詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、共に此の世の樂しさを賞めたゝへるが、是は極めて皮相な感じで、少し丁寧に考へて見れば、世の中は決してそんなに無事・平穩なものではない。　鳥がかく歌つて居られるのは、今日までに數十萬の蟲を食殺した結果で、歌

ひながらも、尙蟲の命を取らうと探して居る。又蝶が斯く舞つて居られるのも、幼蟲のころに澤山の葉類を食ひからした結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も小鳥の命も殆ど風前の燈の如く、一つ油斷すれば忽ち食殺されてしまふのである。なかなか氣樂に遊んでばかりは居られぬ。動植物は總べて斯くの如く相殺し相食うて、自然界の平均を保つ

てゐるのである。

斯かるところへ年々歲々動植物の各種が夥しく子を生むのであるから、其の多數は無論他の動物のために餌として食ひ殺され、生きのこるものも、餌を得るために甚しく相爭はなければならぬ。動植物の增加力は非常なもので、魚類の如きは一生涯に數百萬の卵を生む。それ故、若し生れる子が代々悉く生存し繁殖するものと假定したならば、その增加は無限なるべき筈であるが、實際は生れる片端から他の動物に其の大部分を食はれてしまふから、著しい增

加がないのである。

なほ其の上に、一地方に於ける各種の動物の食物の總量には常に制限があつて、生き殘つたものを皆養ふ事は到底できぬ。假に今、一疋しかゐない兎を饑に迫つた二疋の犬が見付けたとしたならば、先にそれを捕へた犬は飽食し、後れた方は結局餓死せねばならぬ譯である。それ故如何なる動物も食ふための競爭は免れぬ。また兎の二疋ゐる處へ犬が一疋來れば、速く逃げた兎は逃げ、遲い方は食はれてしまふ譯である。それ故、大抵の動物は、食はれぬための

競爭も避けることは出來ぬ。

かやうな譯で、動植物ともに、各自みな食ふやうに、食はれぬやうにと競爭してゐるのが、生物界に於ける實際の狀態である。（進化論講話）

九　梧窓漫筆

太田錦城

一

儉素の本は財を積みて富まむとに非ず、財の費を惜しむにもあらず、唯「人、天地の間に生れて上下の差あるも、共に是同胞の人なり。然るに、同胞の間に衣食

住に乏しく、一生困苦するものあるに、我獨り天地に何の功德ありてか、美衣腴食して天物を暴殄すべき。」と云ふ理を眞に知り、天の冥鑒を畏れて、衣食・居住の事を節するに在るなり。是成德の本なり、養生の術なり、子孫長久の基なり。學道の人は先づ是よりして眞智を開くべし。

二

子孫に福なければ、如何なる財寶を貽せりとも守り得ず、子孫に福あらば、財産を傳へずとも榮昌すべし。されば、子孫へは積德・積善を貽すより外の術なし。

袁了凡　明末の儒者、名は黃。

橘千蔭　江戸時代の歌人。

積德・積善も人を憐み人を救ひ人の爲をなすより外の術なし。天地の間に功あるものは、袁了凡が陰隲の學なり、心得べき事なり。橘千蔭が父の歌なりとて敎へし人あり、其の歌に云ふ、

行末の榮え願はゞ人のため
　善からむ事の數を積みてよ

三

今日にて天下第一の用たるものは金銀なり。されども、金銀の事のみ主張せば、士氣鄙劣になりて利欲にのみ走り、仁義の道は塗炭に陷らむ。人に仁義の

心なくば、唯利欲の心のみ。人心利欲のみ熾盛ならば、父と君とを弑することも憚らじ。是亂世の基を啓くなり。唯儉約を主張して、困窮せざる樣に計らはば、仁義の道をも失はざるべし。

四

一粒の米一寸の紙も大切にすべし。米粒・寸紙を粗末にする人は、必ず天罰を蒙りて、身を亡し家を滅す人なり。米粒・寸紙を惜しむは吝嗇に非ず、小量に非ず、天物を暴殄せざるの大道なり。古より大功業を建つる人は、麁豪にして浮氣・粗心の人には非ず。

謝玄　支那東晉時代の將軍。
符堅　支那前秦の王。
晉　東晉の事、皇紀九七七年より一〇八〇年まで續けり。
郗超　支那東晉時代の朝臣。
郭子儀　唐の玄宗・肅宗に仕ふ。
安・史の亂　玄宗の時安祿山反し、肅宗の時史思明反す。
唐　皇紀一二七八年より一五六七年まで二十帝三百九十年間續けり。

謝玄は三萬の兵にて、符堅の八十萬を打破り、晉の宗社を存せし程の人なるが、郗超の「平日履屐の間にも其の任を失はず。」と云ふ處にて、其の必定勝利を得べき事を知りたり。郭子儀は安・史の亂を戡定して、滅びたる唐の宗社を中興せしほどの大功の臣なり。されど、年中、外より來る書牘の上包の紙を綴りて小册子となし、日々の日記を付け給へり。是にて大功業を立て、大事を作す程の人は、粗心の人に非ざるを悟るべし。

五

節」用愛」人　論語中に在る孔子の語。

儉は孔子の宣へる「節」用愛」人」の義なれど、末世儉を主張する人々皆吝嗇になり、私欲のみ熾になりて、慳貪甚だしく、奢侈の風の猶人を惠み人を賑はすの氣習ありしには遙かに劣れり。奢侈の美なるには非ずして、儉の方を失ひたるなり。とかく儉は自ら己を節約して、出來得る限り人を惠むことなりと心得べし。（梧窓漫筆）

一〇　天龍川堤防始末書

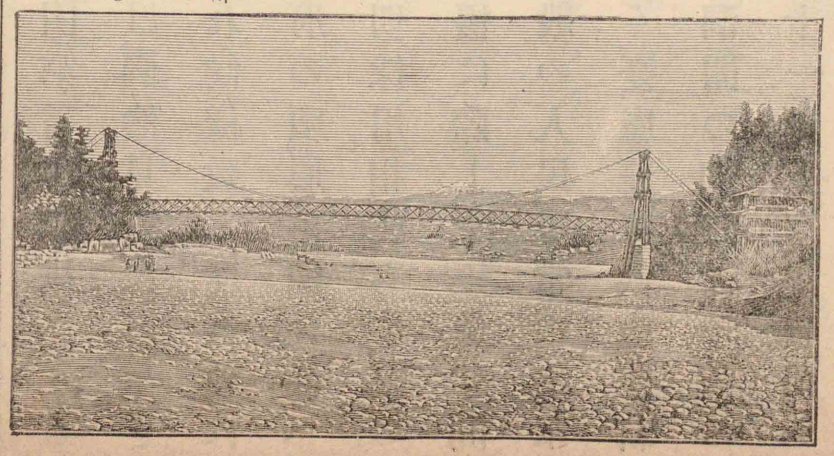
金原明善

私儀祖先以來天龍川近傍に居住仕り、古來水害を被

天龍川　信州諏訪湖を出で遠江を貫流して海に入る。

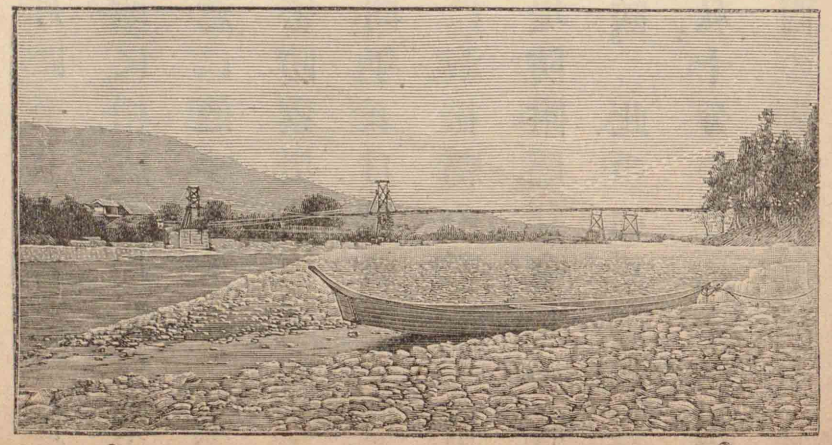
ること幾回なるを知らず、其の困窮言ふに堪へざるもの有之、別して貧民に至つては、憫然見るに忍びざるもの多く、何卒此の災害を免れ候樣致し度、父祖に於ても格別心痛苦慮仕り、舊幕府の頃、屢、出願仕候へども、當時の有司定規に泥み、一切採用相成らず、其の後慶應三年丁卯の年は、東西紛擾に際し、丸一箇年間堤防修築等の事も無之、水下一般の人民、尋常の出水にても多少の災害あらんと、深く憂慮罷在候處、維新萬機御親裁仰せいだされ、言路洞開の御時節、千載の一期と雀躍仕り、明治元年三月十一日上京、民政局へ

防水の義建言仕候折柄、父大病の趣申しきたり候につき、代理の者殘し置き歸鄕致し候處、固より水下人民のために身命を拋ち、朝廷へ建白仕候者、親の病氣なればとて罷り歸る次第無之と、亡父の大譴を受け候儀、今に心魂に徹し居り申候。其の後閏四月十一日再度上京、建白仕候へ



水神橋

ども、御採用無之、右の儀は三州吉田裁判所へ願ひ出づべしとの指令につき、卽ち同廳へ出願致し候中、數日の大雨にて五月十九日堤防三千間餘潰裂に及び候間、さし向き右修築の儀頻に懇願仕候處、八月十四日に到り、岡本會計官權判事、高石營繕司權判事該地に出張有之、此の時堤防



修築御用掛仰せ付けられ、十一月に至り悉皆落成仕候。爾來當國一圓靜岡藩の領地に相成り、堤防修築は年々に有之候へども、明善が意に適するもの無之、茲に於て明治四年辛未三月、水害防禦堤防修築費として該藩へ金千圓を獻じ候處、同年五月堤防重立取扱を命ぜられ、續いて該地方更に濱松縣の所轄と相成り、尙復千圓を獻じ、同年五月堤防附屬拜命、此の時始めて三つ組銀盃を賜はり申候。　此の如く御賞賜はり候へども、堤防に至りては私十分の見込未だ出來致さず候につき、明治六年癸酉の歲より、危險なる

場處は年々自費を以て修築致し、毎年凡そ金千二三百圓づゝを費消し、かつ東西水下の村々よりも、人足二萬五千人程づゝ年々補助致しくれ候へども、到底十全の見込相立ち申さず候につき、明治八年三月廿七日治河協力社設立を願ひ立て、四月廿一日官許を得、卽ち社長仰せ付けられ、追〻仕法相立ち來り候へども、何分日なほ淺きを以て、協力のものも鮮く、資本金僅かに四五千圓に過ぎず、容易に志願成就の見據ゐ無之、因つて熟〻勘考仕候處、私身代僅少には候へども、財產悉皆概算仕候へば、凡そ金六萬三千五百拾六圓

七錢程は有之べく、此の中私夫妻並に子供三人都合五人の資金として、金二千五百圓をひき去り、其の餘は悉皆官へ獻納つかまつるべく、其の上、官より之を當社へ御下げ渡し願ひ奉り、右金額悉く防水費用に充て、且天龍架橋の儀も永世當社へ御任せ相願ひ、其の他山中より出す所の川下材木取締料約定金等該川に係る所の諸得益金は、一切堤防の費用に充て候樣致し度、さりながら右位にては瑣細の事にて、願意の百分の一も屆き兼ね候次第につき、年數二十年間、年々金二萬三千圓づゝ御下げ渡し相成り、該川二俣村より掛塚村に至る凡そ七里許り、禦水堤防の事は都べて當社へ御委任下し置かれ候樣仕度、尤も二十一年目よりは一錢も御下げ金を願ひ奉らず、該川防水筋の儀は一切引受け、別に御手數等相掛け奉らざる儀につき、前申上げ候始末御採用なし下され度懇願奉り候。

一一　朝鮮雜觀その一

芳賀矢一

或米人は朝鮮を呼んで仙人國と云つた。この仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千數百萬

の仙人が皆我が新しい同胞である。仙人にも段々吾々の仲間入をして活動して貰はなければならぬやうになつたが、黑い冠を被り、白い著物を著て、悠然として市街を歩いて居る朝鮮紳士の風采を望めば、如何にも仙人らしい樣子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この煙管そのものが又優長といふ感を一層多く與へるのである。貴賤上下悉く純白な著物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。是は夏だからさ

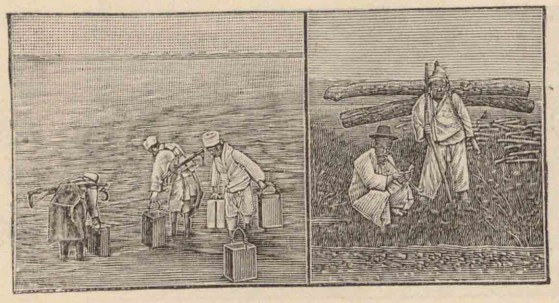
うといふわけで無く、冬でもやはり同じである。尤も何處の國でも、古い時代には眞白な着物が流行するが、其の中に色々の染色や縞や飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行はれて居る朝鮮は、實に不可思議な國といはなければならぬ。子供は折々桃色や萌黃や藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の女の子の樣に美しい花・紅葉の染模樣では無い。婦人もまゝ紅色・萌黃色の衣を着けて居るが、模樣や縞は少しも無い。殊に婦

人がかつぎのやうなものを着て、目ばかり出して歩いて居るのは、日本の古代風俗をその儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。　低い屋根の下で眞桑瓜などを食つて居る樣子は、何處となく「今昔」の物語をまのあたり見るやうである。

今昔　今昔物語の略。和漢古今の雜話を集めたる書、六十卷、源隆國の著。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことをかねて聞いて居つたが、今は田舍道でも蝙蝠傘を手にして歩いて居る人を見受ける。　それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に冠の上に小さな傘を載せて居ること

である。　竹の骨に油紙を張つたものである。　日本のからかさは之を大きくしたものだなと感服した。　又頭に大きな饅頭笠をかぶつてあるいて居るのが往々ある。　これは喪中の人で、喪中は一年でも二年でも常にこの笠を用ひて居るといふ。　如何さま禮儀のかたい處だ。　朝鮮・支那・土耳古、皆それ〴〵の冠物を今でも保存して居る。　日本人は古い物も保存して居るが、新しいものは又何でも用



朝鮮風俗その一

ひる。洋服に下駄をはき、紋付の羽織にシルクハットをかぶる者さへある。

朝鮮人が物を運ぶには、男は背、女は頭を用ひる。男の背には例の支繋（ツガ）といふものをかけて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋がやはり唐茄子や胡瓜を背負つて來るので、日本のやうに天秤棒で肩に擔ぐことはしない。男も女も山へ柴刈に行く。女は洗濯物でも何でも頭へ載せて行く。これは京

朝鮮風俗そのニ

都の大原女式である。併し大原女のやうに張板や梯子などを載せてあるくのは見受けなかつた。

一二　朝鮮雜觀その二

芳賀矢一

朝鮮には虎が居る。「竹に虎。」といふが、竹は少い。是は氣候のせいである。竹の簾や扇子や竹細工もいくらかあるが、概して日本のやうに廣く工業には使つて居らぬ。京城では竹竿一つ見つからなかつた。洗濯物が干してあるのを見ると、大抵繩にかけ渡してある。又田舍などでは丘の上にひろげて並べて

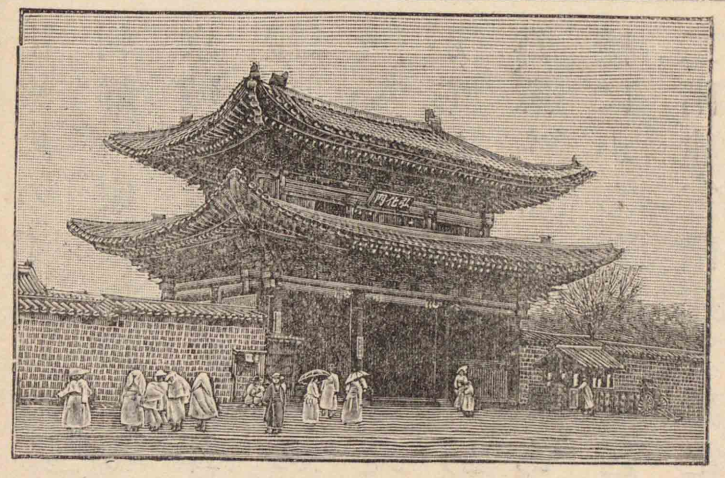
ある。桶・盥のやうなものにも竹のたがは無い。竹の無い所へ行くと、今更に竹の效用の廣いのに驚かれる。水道栓の側で水を酌んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空鑵を用ひて居る。如何にも貧乏げにあはれに見える。瓢簞をたち割つたものが、水を酌む杓子であるのは古風で面白い。

朝鮮人のはき物は、男のも女のも皆靴で、日本のやうな下駄・足駄は見當らぬ。靴の下に齒の附いたものはあるが、鼻緒を立てゝ、其の鼻緒を足の指にはさんで歩くといふことはない。是は日本人より外には

出來ぬのであらう。

朝鮮の家は如何にも低くて、むさくるしく見える。京城には流石に瓦葺の家も見えるが、田舍は殆ど藁屋ばかり。その藁の葺方が、日本の如く奇麗に端をそいで無い。唯藁を打ちかけたやうな屋根で、遠くからは豚小屋のやうにしか見えぬ。寒さを恐れる爲、窓を小さくしてあるから、陰氣で、日本の田舍家の樣にからりとして居らぬ。元來朝鮮では、庶民には二階建・三階建を禁じてあつた。それ故庶民の家は皆低い。地に這つて居るやうである。又家を立派

にすれば、金持と認められて、すぐに取立てられるから、金持でもわざと外觀を汚くして居た。合邦後は段々と二階造の高いのも出來るさうである。



昌德宮弘化門

民家に比べれば、王宮は比較にならぬ程、規模が大きくて立派である。就中さきの王宮景福宮は大院君の造營せられた御殿で、幾多の宮殿・樓

大院君　朝鮮李朝にて國王の生父に奉れる尊號にして、李朝には此の號ある人四人あれど、普通には最近の大院君李昰應を指す事となれり。

閣が相連つて廣大なものである。それを造るためには民の疾苦をも顧みず、存分に膏血を絞つて築いたので、此の宮殿が卽ち李朝に祟つたのだといはれて居る。この宮の正門の通りなどは、幅六十間、東京にも滅多に無い。現王宮昌德宮も拜觀したが、之は近世の洋風に塗りかへ、西洋の椅子・ソーファなどがあつて面目が改つて居る。一體に樹木の少い京城に於て、昌德宮の裏の內苑だけは流石に老樹が生茂つて居る。併し、何等林泉の美とては無い。小さい溪流の石に題した句に、「飛泉三百尺、疑自九天來」とあ

るには驚いた。民家の見すぼらしいのよりも、更にあはれに感ぜられるのは山に樹木の無いことである。總督府のある南山の方にはまだ少しはあるが、北の方の山には全く無い。其の他釜山から京城までの間、山といふ山は皆禿山である。余の旅行は夏であつたから、まだ草の色の綠があつた。冬は滿目皆赤く、荒涼たるものであるとの話。歸路の船中、段段九州・中國の山が見えだして鬱蒼たる樹木のあらはれて來るのは何よりもうれしかつた。

朝鮮の山を禿山にしたのも、朝鮮の家屋を豚小屋のやうにしたのも、乃至は長煙管をくはへて悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の惡政の罪である。苛政は眞に虎よりも猛しである。憫むべき我が一千萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第に離れて、嘻々として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。（學生）

總督府　京城倭城臺に在り。

南山　京城の南方にある木覓山の一名。其の中腹倭城臺に總督府あり。

釜山　朝鮮南端の港。

苛政は云々　禮記に「苛政猛於虎」と在り。

八道　朝鮮八道、即ち慶尙道・全羅道・忠淸道・京畿道・江原道・平安道・黃海道・咸鏡道。

一三　八道の山

大町桂月

八道の山よいざさらば　年の七年戈執りて
踏み荒したる日の本の　益荒雄は今歸るなり

釜山の浦の秋ふけて　空もしぐるゝ夕閒暮
波路遙かに帆を揚げて　汝と今や別るなり
知遇の恩に身を捨てゝ　四百餘州をわが駒の
蹄に蹴んと勇みしも　覺めて儚き夢なれや
我を知りにし太閤の　世になき後は誰が爲に
千里の外に戈執りて　異境の山にいくさせん
恥をしのびて故郷に　歸るも後に死なんため
主君の家の行末を　思へば重き命なり
あはれ太閤世を去りて　よつぎの主は幼し
石田*・小西*の小人ばら　かならず事を誤らん

石田　名は三成。
小西　名は行長。

わが幼時より育まれ　惠にあみし豐臣の
家を護りて死なん身の　永くは住まじ世の中に
跡に見捨つる益荒雄の　亡魂若しも知るあらば
三途*の川や六道*の　辻にしばらく我を待て
これをかぎりの見納に　今一度と見返れば
波音すごく雨荒れて　野山は霧に朧なり
八道の山よいざさらば　國の譽とたゝかひて
花と散りにし日の本の　男子の骨を護れよや

（黄菊白菊）

一四　札幌農園

菊地幽芳

三途の川　死後の世界にありといふ川。
六道の辻　死後の世界なる六界に行く分れ目なりといはる。

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。　札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。　農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は卽ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縱横に發揮せられて餘蘊なきに近し。　然れども余はこゝに農園の設備を說かんとするものにあらず。　余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致

にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指してその際涯を知らず。　萋々たる牧草、氈の如き處、こゝにはかの林中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空閒を占めて處まばらに立てる楡ありて、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。　何に遮らるゝものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽

ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾なく發揮せられたる此の楡の美に驚嘆せざらん。

それ廣漠たる平野の綠は既に人の心を快濶ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致を添へ來るを覺えざらん。唯その喬木の種類によつては、またその風致に多少の增減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實にその高さと共に深さを有し、深さと共にまたその幅を有するもの、分明に云へばその

枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹蔭を作る喬木たらざるべからず。請ふ、斯くの如き喬木の、森々として青綠の平野に立てる樣を想像せよ。何ぞその畫の如くにして又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、其の人は即ち遺憾なく札幌農園を其の腦裡に描き得たるなり。

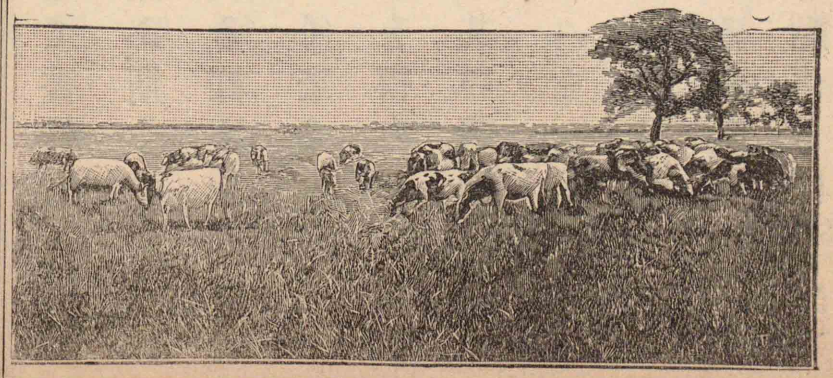
農園が楡によつてその風趣を加ふること斯くの如し。然れども、これなほ靜態における風趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、

Ayrshire　Holstein

農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。

丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短きエイアシャー種の牛等が、此處に彼處に草を食へる、或は

札幌農園

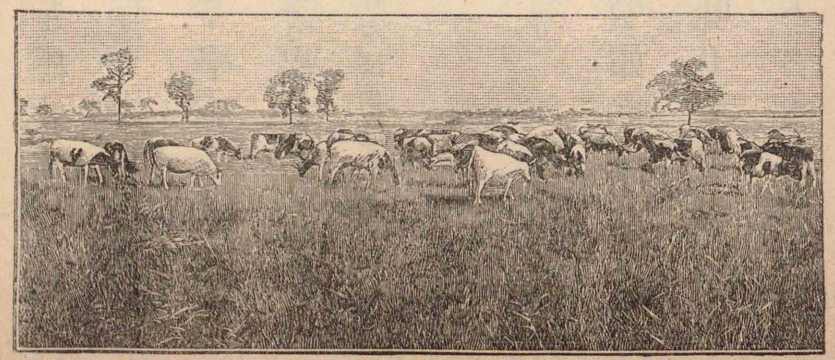


Merino

は尾をふれる、更にうるはしき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づきの來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、その關門は實に斯くの如き處なるべし。

その繪畫的なる、その詩的なる、又附近の建物と相待つてその米國的なる、少くともこゝに來るもの

内牧の場

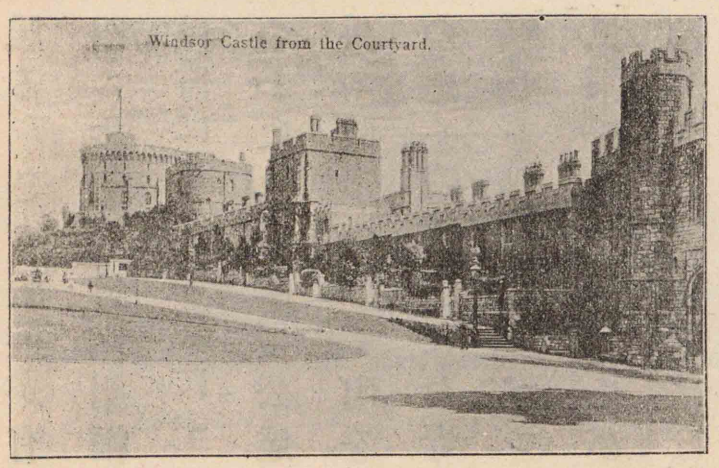


は、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。札幌農園は實に斯くの如き特色を有す。余は斯くの如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、又此の學校より往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。（日本海周遊記）

Eton
Windsor Castle
Thames

一五　イートン校

*ウインゾル宮の下に*テームスが帶の如く流れて居る。末は如何なる巨船・大船をも呑吐して、世界第一の港たる倫敦に活氣を與へるテームスも、此處では平凡なる川に過ぎない。ところが其の平凡なる川が、英國の生命をやしなつて居る。英國の生命とは何ぞ、*イートン、カレッヂが卽ちそれである。



ウインゾル宮

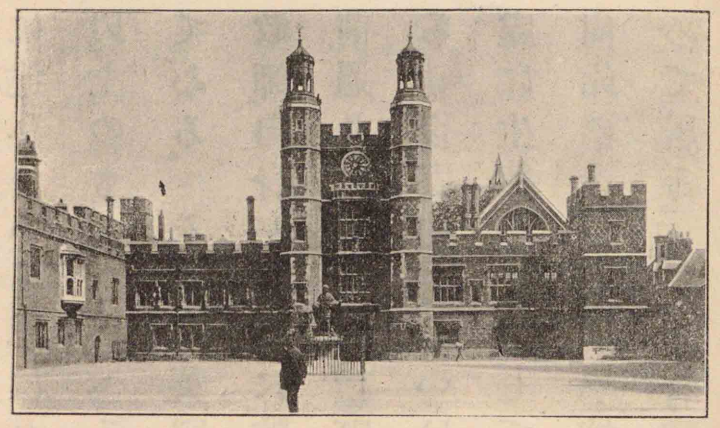
テームスを渡つて、否渡る程もなき小さな橋を一跨ぎしてイートン町に出ると、フロックコートに折高襟の小紳士が、絹帽を冠つて往來して

Eton College

Gothic

居る。この服裝が有名なイートン校の正服で、十三四の少年が日常絹帽にフロックの姿は、東洋流の衣は骨に至り袖腕に至るとはまるで正反對である。いかにも平家の公達に似たるイートンの學生が、新兵の散歩の如く町を歩いて居る。これが既に一種の感を惹く上に、お寺の如きその學校が、更に一層の感じを與へる。ゴシック流の建物に渦卷形の破風、風雨千年、古び神さびて何かの靈も宿るべき陰欝の趣がある。校庭には、數百年も經たらんかと思はる柳の枝の陰暗く垂れた處に、例の潤つぽい英國芝

Harrow



校から出て居る。

が、一面に青色を湛へてゐる。この中から英國の柱石たる人物が醞釀されて出るのかと思へば、尚更に一種の感に打たれざるを得ない。

イートン、カレッヂ（ハーロー）と與に、英國の二貴族學校の一であつて、古來英國の大政治家、大豪傑等は多く此の燻つた學然う思つて見れば、此の燻つた處

が亦生命で、その中に古來の豪傑の靈が籠つて居るに違ひないと思はれる。英國の教育家は知識・技藝以上のものを與へるといふ趣意を以て生徒に接してゐる。それ故英國の中學教育は多く寄宿舍制で、教師自身が直接に監督して居る。イートン校には前通りにも其の横町にも箇々獨立した寄宿舍がある。否寄宿舍といはんより、教師の住宅があつて、其處に生徒が分宿して居る。二十世紀の今日、英國は尚此の寺子屋的學校制度を執つて人格の養成に努めて居る。學問・智識は社會に出てから、一生の勉強

cricket
golf
lawn-tennis
foot ball

で發達する、少年・中年の時代に於ては、專ら人間の基礎を作つて置かなければならぬと云ふのが、此の寺子屋制を捨てさせぬ所以である。それ故一般に英國の教育は試驗責でなく、詰込主義でなく、個人の特性を尚び、各自の思索に任せ、應用の機能を養ひ、以て實際的の力を養ふ事に努めてゐる。學課の如きは一日平均二時間といふ僅かなもので、その餘は大抵運動に當てゝゐる。運動は端艇・乘馬・クリケット・ゴルフ・ローンテニス・フットボール等である。この運動中に學生の人格を養ふ。たとひ些々たる勝負事

にも卑劣の行動があつてはならぬ。英國では二人の勝負に、第三者の飛出ることは非常なる恥辱としてある。自分の友人が強い者と喧嘩して負けて居ても、手を出してはならぬ。二人は二人、弱いながらも自力で闘はねばならぬ。而して一方が負ければ、勝つた方は其の負けたものを扶け起し、和睦の握手をして去るといふ習慣で、日本の武士道に似て居る。此の武士道が英國では遊戯で養はれる。或人は、「英國に此の遊戯の衰へぬ間は、國家も安全である。」と謂つて居る。

Oxford

イートンの寄宿舍では、生徒が教師と起臥を共にして、紳士の作法を習ふ利益がある。例へば髯は自分で剃れ、食事にナイフを口に入れるな、卓子に肱をつくな、人の前で髭を捻るな、人の前で楊枝を使ふな、人の顔を覗き見るな、人の手紙の宛名を見るな、と云ふ樣な細かな形式に至るまで教はるのである。而して其の教養の爲には教師は其の生徒を打つても構はぬ風習が殘つて居る。一通り、こんな觀察を得て、余は英國人物の仕上場たるオックスフォールド*に向つた。

（鳥居素川―「頰杖つきて」による）

一六　英佛獨の國民性

和田垣謙三

個人に個性あるが如く、國民には國民性あり。或は之を國民心理ともいふ。茲に英・佛・獨三國民の心理的特色を極めて具體的に髣髴せしむる面白き假設談あり。

今試みに「象は如何なる動物なるか。」といふ問題が英・佛・獨の三國人に課せられたりとせよ。英人は倉皇旅裝を整へて、印度或は阿弗利加等象の産地に赴き、實地に其の生立よりの生活狀態を目擊して、精細に之をノートブックに記入すべし。其の記事は或は前後し、或は錯綜して、要領を缺く點なきに非ずと雖も、其の材料は確かに之を其の本源より蒐集し來りしものにして、事實に於て誤なく、又些の想像・臆說を其の間に挿まざるなり。

佛人は卽ち早速動物園を訪ひ、其處に繫げる一頭の象に近寄り、尺を以て其の身體各部の寸法など丁寧に度り、又筆を執つて其の形體・色合を巧に描寫し、而して極めて明確巧妙に、面り之を見るがごとく、其の體格・資性・習癖等を書聯ね、行文流暢、理路整然たる報

告を作るなるべし。

獨人は如何。彼は全然筆法を異にし、他の英・佛兩人の答案の出來上るを待つて初めて着手す。即ち辭を低うして兩人に答案の借用を懇望し、之を得るや書齋に閉籠り、兩答案を机上に置きて、左顧右盻、先づ佛人の答案より意見の大要を抜寫し、更に英人の答案より之を説明し證明する材料を求め來りて、比較的批評的の一文を物し、之に自家の理論を附加して、英人の答案にも佛人の報告にも見る能はざる、而も其の論據と材料とは英・佛二者の内に存する一種編

Venice

纂的の答案を作るべし。

要するに、英人の答案の特色は動的なるにあり、而して長所茲にあり、短所亦茲にあり。佛人の特色は靜的なるにあり、而して長所茲にあり、短所亦茲にあり。獨人の特色は即ち動靜並に備り、清濁併せ呑むにあり、而して其の長短又同じく茲にあるなり。（吐雲錄）

一七　水の都

ヴェニス*は伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。

Po　　Rialt

此の都は北伊太利の沿岸で、ポー*の河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居り、又海に向つては長く斗出した洲崎に依つて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城廓の樣なものだ。街は其の潟の中央なるリヤルト*の島に置かれた。中世の始め、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて、此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むことなつた。これがヴエニスの創始である。此の地は軍事上險要の地であつたばかりでなく、其の潟は少からぬ漁鹽の利を藏して居つた。ヴエニスの住民がおひ〳〵發達した其の資源は、此等の利に依つて得たものである。夫のみでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つて居たので、遂には中世第一の商業市と云はれる位な盛況を呈するに至つた。

ヴエニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに、安全な生活を營む事が出來、水あればこそ漁鹽の利を收むる事が出來、水あればこそ更に四方に航海・通商を試みることが出來た

のだ。其の美しい風景も亦全く水の賜に外ならぬ。此の如くしてヴェニスは全く水から生れた樣なものだ。ヴエナスの女神は水に浮ぶ泡から生れたが、ヴェニスの都も亦それに似たものと云へよう。始め都は海に面した洲崎の一端なるマラモッコーにあつたが、後に潟の中央なるリヤルトの島に移つたのである。今は此の島全體が都となつて、其の間を縱横に無數の運河が通じて居り、人は此の水の通りをゴンドラと呼ぶ古風な小船に乘つて往來する。多くの人家は直ちに水に臨んで居るから、戸口の石

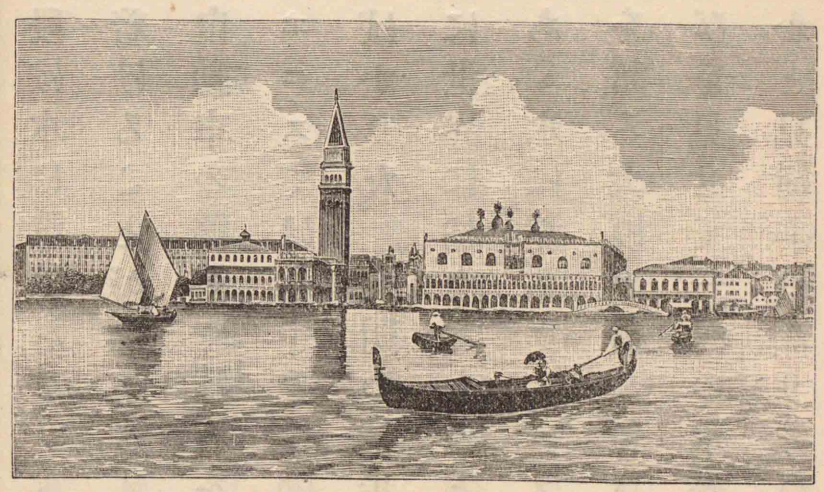
ヴエナスの女神（Venus）ローマ神話中にある女神、海水の泡より生れたりと稱せらる。

Malamocco

Gondola

段は水に洗はれ、ゴンドラの船は直ちに此の戸口に着けることが出來る。他の都市ではけたたましい自動車の警笛や、鋪石を軋る轍の音で喧しいのに、ヴエニスでは水を分けゆく靜かな櫂の音が聞かれるばかりだ。文明の進歩した今日、此の如き都市は實に世界に稀なるものと云つて宜しい。

あゝ水に浮ぶヴエニスの都、寺院に宮殿に、昔の榮華を語る大厦・高樓が、色さまざまの大理石に時代の古びを見せて、一灣の水、晝の靜けさに眠る上に、屋氣樓かと見紛ふばかり浮び出る時、或は夕日に赤く彩ら



ヴェニス

れた眞帆片帆の、滑かなる水面をたゆたふ時、或は又遠く銀髮の靡けるが如く潟の彼方を限る洲崎の閒を分けて漁船の歸り來る時、若しくは月靜かなる夜、ゴンドラの船歌面白く、水に映る町の燈火を櫂の先にかき亂して行く時、水に浮ぶヴェニスの都の美しさは如何に遊子の心を

Adriatic Sea
Syria

動かすであらう。朝の霞にも、夕の霧にも、春夏秋冬、ヴェニスの美は卽ち水の美に外ならぬ。

併しヴェニスが水に負ふ所はたゞに其の美觀のみではない。ヴェニスは實に水の爲に立派な海港となることが出來たのだ。卽ち其の住民は水を利用して、アドリア*海から遠く東に航し、小亞細亞・シリヤ*・埃及の沿岸に通商貿易を試みた。從つてアドリア海はヴェニスの爲には貴重なものであつて、これがなければあの樣な發達は到底望まれなかつたのである。されば昔のヴェニス人はアドリア海を

ヴエニス市の夫と見立てたのである。都を妻とし海を夫とする、何と美しい想像ではないか。ヴエニスが繁榮を極めた時代には、以上の想像に基づいて、茲に昔床しい儀式が行はれた。それはヴエニスの町とアドリア海との結婚式である。これは市民が行ふ儀式の中、最も莊嚴華麗なもので、毎年一回づゝ行はれた。此の日、ヴエニスの長官は自ら花を飾つた政府の大船に坐乘し、後には無數の貴族の船を從へ、美々しい行列をつくつて、悠々と海上に漕出し、こゝでヴエニスの都を代表して、黃金の指環を海に投じ、かくてアドリア海と千年の契を籠めたのであつた。夫アドリアと妻ヴエニス、一は人間の作つたもの、一は自然其の者。其の「自然」なる夫は朝夕潮の滿干に洲崎の岸を洗ひ、リヤルトの島を訪れて、千萬年も變らないけれど、「人爲」の妻は衰へて、今は到底昔の誇も榮華も認められない。（大類伸「ヴエニスとフロレンス」に據る。）

天明・文化・文政　天明は十代將軍、文化・文政は十一代將軍頃。

太田南畝　幕府の士にし

一八　蜀山人の盆燈籠

饗庭篁村

天明より文化・文政まで、久しく文壇の牛耳をとり、寢惚先生の名に、世人の眠をさましたる太田南畝翁の

て文章をよくし、狂歌に巧なりし人。號を蜀山人といふ。

事蹟につきては、面白きこと頗る多し。今左に其の一つを記さん。

文化元年の頃とか、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、殘りしは多ければ、力を落し、情なき顏してかつぎ歸りしが、太田南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ、「偖々困る事かな。

この盆はいかにして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ殘り候。この分にては明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、いさゝか資本もかゝりたり。この分にては水も呑まれ申さず。」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍の者、「斯樣々々にて、又かのぐづ男が泣き申候。」と云ひければ、翁は臺所に出でられ、「偖も氣

の毒なる事よ。　顋の下が乾きては誰も難儀ならん。わが云ふ如くせば、少しは賣れる事もあるべし。」と云はれければ、「それは有難き事に候。　いかに致すべきか。」と、翁の顏をいかにも有難氣に仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、「これにてその燈籠を張替へよ。　われそれに何か書きてやらん。」といはる。　悅びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持ちきたれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ一禮を述べて、荷ひ歸りながらも、「蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書の反古張にては買人はあるまじ。　さりながらあれ程に仰せられしものなれば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、賣れ殘りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋*も借りて外商ひの資本とせん。」と、工面顏にて足も重く、二三町あゆむ向ふより侍一人往過ぎしが、供の者に云ひ付けて、「その燈籠は賣物か。」と問はしむ。　偖は

二百疋　一兩の二分の一。

と悅び、「いかにも賣物に候。　やう〳〵傳を求めて先生に書いてお貰ひ申したるにて、心あても有りて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候。　お望な

五十文　九百六十文にて一貫、六貫三百文程にて一両。

らば差上げ申さん。」と云ふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。幾許と云ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて「五十文。」と云ふ。「その直にて二つくれよ。」と、百文渡して買行きたり。又跡より通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」と云ふ。今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」と云ふ。いふがまゝに又買行きたり。跡より又「此方へも二つ。」「我にも一つ。」といふ有様にて、おのが家に歸るまでに二十許りも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つてかくと女房に話せば、「誠に寢惚様は生佛様なり、あり難き事

なり。明日は早くより持出で給へ。私も參りて手傳ひ申さん。一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智恵の慾が先なり。翌朝夫婦はにこ〳〵、七つ起して神樂阪に行き、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と立ちどまりて價を問ふ。庄助思ひ切つて「百文。」と云へば、「さもあらん。」と百文にて買行く。女房、夫の袖を引き、「百にても直切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文と云ひ給へ。」と、又智恵をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百は餘り高

かるべし。　百五十文にせん。」と云ふ。　それより百五十文にて六七十賣り、つひには先見明かなるその妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ。」と肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣り切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主を搔きのけて女房まかり出で、「有難い。」を數千遍のべて、「いかにも先生は生神樣なり。」と、今度は神あしらひにしつゝ悅びかへりきとぞ。　翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。（雀躍）

一九　我が家の經濟

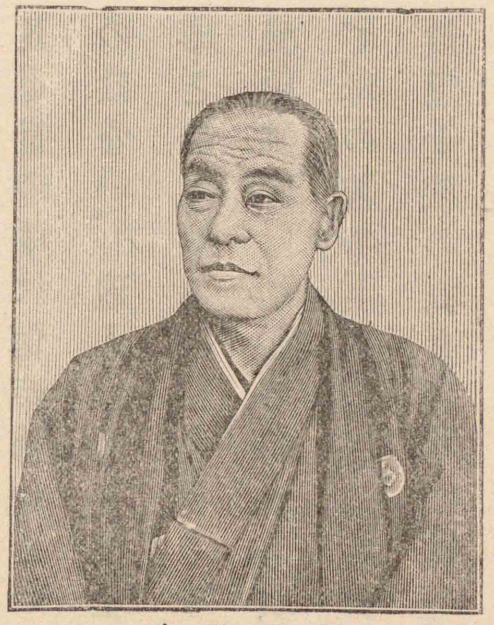
福澤諭吉

凡そ世の中に何が怖いといつても、借金ほど怖いものはない。　他人に對して金錢の不義理は相濟まぬ事と決定すれば、借金はます〳〵怖くなる。　私共の兄弟姉妹は、幼少の時から、貧乏の味を嘗め盡したので、母の苦勞した樣子は生涯忘れる事が出來ない。

貧乏士族の衣食住、その艱難の中に、私共が母の感化を受けた事は數々あるが、其の一例を云へば、私が十三四歳のとき母に云付けられて、金子返濟の使をし

た事に斯う云ふ話がある。

*天保七年大阪に於て、私共は父を失ひ、母に從つて故郷の*中津に歸つたが、其の時、家の普請をするとか何とか云ふのに、勝手向は勿論不如意だから、人の世話で賴母子講を拵へ、一口金二*朱づゝで、何兩と纏まつた金を作つて、一時の用を辨じた。それからは毎年幾度か講中が二朱づゝの金を持寄り、鬮引で誰か一人それを取り、滿座に至つて皆濟になる仕組であるが、大家の人は二朱許りの金の爲に何年もこんな事に關係して居るのは面倒だと云ふ所から、一時二朱の掛金を出したまゝで手を引く者がある、之を掛棄と云ふ。所が、私の家の賴母子講に、大阪屋五郎兵衛と云ふ廻船屋が、一口二朱を掛棄にしたさうである。勿論、私は三四歳頃の事で何も知らなかつたが、十三四歳の時、或日母が私に「お前は何も知らぬ事だが、十年前に斯う〳〵云ふ事があつて、大阪屋が掛棄にしてゐる。つまり福澤



福澤諭吉

天保七年　二四九六年。

中津　豐前の町名。維新前には奥平侯の城下。

二朱　一兩の十六分の一。

の家は大阪屋に金二朱を貰つたやうなもので、誠に氣が濟まぬ。　武家が町人から金を惠まれて、夫を唯貰つて默つて居ることは出來ぬ。　疾うから返したい返したいと思つては居たが、どうも爾う行かなかつた。　やつと今年は少し融通が付いたから、此の二朱の金を大阪屋に持つて行つて、厚く禮を述べて返して來い。」と云つて、其の金を紙に包んで私に渡した。其から私は大阪屋に行つて金の包を出すと、先方では意外に思つたか、「御返濟など却つて痛み入ります。最早古い事です、決してそんな御心配には及びません。」と云つて頻に辭退するが、私は母の云ふことを聞いて居るから、是非渡さなければならぬと、互におし返し、口喧嘩のやうに爭うて、金を置いて歸つたことがある。　今は早五十二三年も過ぎて、むかしむかしの事であるが、其のとき母に云ひ付けられた口上も、先方の大阪屋の事も、ちやんと記憶に存してゐる。年月日は覺えないが、何でも朝のことと思ふ、豐前中津下小路の西南の角屋敷、大阪屋五郎兵衛の家に行き、主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云ふことまで覺えて居る。

こんなことが少年の時から私の腦中に遺つて居るから、金錢の事に就いては、何としても大膽な横着な擧動は出來ない。私は借金について大の臆病者である。人に金を借用して、其の催促に逢うて、返すことが出來ないと云ふときの心配は、あたかも白刃を以て後から追ひかけられるやうな心地がするだらうと思ふ。（福翁自傳）

上杉景勝　上杉謙信の養子。

二〇　伊達正宗の國入り　新井白石

上杉景勝が兵起りし時、伊達左京大夫正宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻入るべき由の仰承つて、大阪を打立ち、夜を日に繼ぎて馳下る。

慶長五年石田三成と計つて家康を除かんとす。當時會津にありき。

伊達左京大夫正宗　仙臺城主。

白河　岩代國西白河郡、陸羽街道にあたる町。

白石　同國石川郡に在る村、今山白石・里白石の二村に分る

相馬　磐城國中村町の事、相馬氏の所領。

白河より白石に至る間は、皆敵の中なれば、道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬に差掛つて國に歸らんとするに、相馬また累代の敵國なり、恙なく通らんこと叶ふべからず。然るに、正宗は僅かに五十騎許り引具して、常陸國を經て相馬の境に至り、先づ相馬が許に使者を立て、「此の度德川殿、上杉を征伐し給ふに因つて、正宗搦手より向ふべき由を承りぬ。路次既に塞がりて候ひし程に、東路に隨ひて漸く此の境

に至り侍りぬ。餘りに道を早めて打ちし程に、士卒悉く勞れぬ。願はくは城下に旅館點じて給はらん。馬の足を休めて、明日は國に入らんと存ず。」と言はせたり。長門守義胤是を聞いて、「あつぱれ、運の盡きぬる奴ばらかな。ただにても伊達は相馬が年來の敵なり。ましてや身方討たれん一方の大將承るといふ者を、いで〳〵今宵一夜討して、案内知らぬ者どもを、此處・彼處に追詰めて、一人も殘さず討取つて、年來の仇に報い、此の度の賞に預らばや。」とて、頓て民家をしつらひて迎へ入れ、家子・郎從等召集めて、夜討の樣

長門守　相馬義胤。上杉景勝に黨せり。

をぞ議したりける。

爰に水谷三郎兵衞尉某、遙かの末座より進み出で、「末座の意見恐れ入つて候へど、既に僉議の座に列つて候上は、心に存ずる所を申さざらんは其の詮なし。抑『窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さず。』とこそ承れ。正宗程の大名が、既に年來の怨を棄て、君を賴みて來りしを、たばかつて闇々と討たんは、勇者の本意とする所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり。又我が城を去つて彼の國の境、駒が峯に到らんこと、行程僅かに三里。けふの日未だ未の時に下らず。正宗おの

駒が峯　磐城國中村の北方にある山。

が境に到らんとだに思はば、日ゆふべならざる間に到りぬべし。それに僅かの勢を以て此處に止る事、あに深き謀計あらざらんや。たゞ同じくは我が備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此の度は本國に返し給ひ、重ねて戰に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はん。」と申しければ、滿座の輩皆此の議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料・魚鹽・秣・糠・藁に至る迄積置きて、夜に入りては、四面に篝火たかせ、共に夜を巡らせ、警衛心を盡してけり。義胤が士卒も、正宗が餘りに取鎭めたる體を見て、「憎し、いざ彼が振舞を試みん。」とて夜更けて馬一二匹切つて放つ。雜人ばら走り散つて、以ての外に騷ぎ罵る。正宗は小童一人に燭持たせ、白き小袖上に打掛けて、左の手に刀提げて立出で、「相馬殿の御人や候、御人や候。」と言ひし時、「さむらふ。」とて參りければ、「物音高う候。何事にや。正宗が雜人ばら狼藉候はんには、よく鎭めてたべ。」とて又内にぞ入りにける。斯くて夜明けけれども立ちもやらず。巳の刻ばかりになつて、義胤が許に使して一禮し、靜かに馬をうつて行く。竊かに人を付けて見せたるに、彼の國境の駒が

峯のあなたに、伊達が軍勢雲霞の如く充ち滿ちて出迎へぬ。

斯くて關が原の合戰終り、天下悉く平ぎて、相馬既に所帶を沒收せられ、家亡ぶべきに極る。正宗、德川殿にたびく〳〵歎きたてまつりしかば、其の事となく、年月を經てのち、本領をぞ賜うたりける。此の時より、かの家年毎の評定始には、滿座の輩一々に水谷が子孫の座の前に進みより、「水谷殿の御意見たがふ事あるべからず。」と色代して罷り出づる事、ながき佳例となりにけり。（藩翰譜）

江川坦庵　通稱太郎左衞門、坦庵は其の號。伊豆韮山の人。

二一　江川坦庵

井口丑二

江川坦庵嘗て富士山の畫に題して曰く、

里はまだ夜深し不二の朝日影

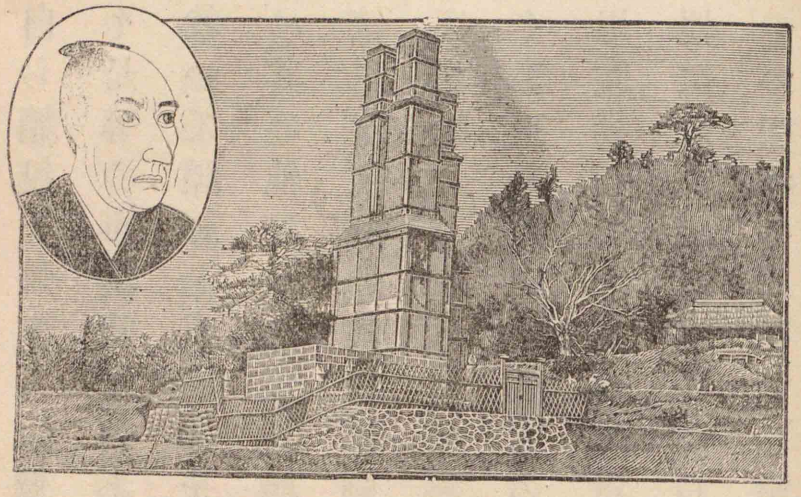
と。泰西第十九世紀の初、蒸氣船の發明ありて、世界交通の狀態は一變し、其の結果、露・米・英・佛等の軍艦我が邊海に出沒せり。然れども我が國民の多數は、なほ鎖國の陋習に安んじ、桃源の夢を貪れるに、先覺者先づ驚き寤めて夜明を報ずること、富岳が四周暗黑の間に、先づ旭光を受くるに異ならず。坦庵は、實に

渡邊崋山　高野長英　共に幕末の蘭學者。

高島秋帆　幕末の砲術家、通稱四郎太夫、秋帆は其の號。長崎の人。

佐久閒象山　幕末の先覺者、名は啓、象山は其の號。信州松代の人。

渡邊崋山・高野長英等と共に、此の先覺者たりしなり。坦庵夙に宇内の形勢を察して、開國・進取の必要を認め、蘭學を修めて泰西の文物を攻究す。又高島秋帆に就きて砲術を學び、終に江川流砲術の一派を開く。砲術研究のため門に及ぶもの前後四千人、佐久閒象山は實に其の高弟なりと云ふ。坦庵又海防及び外交に關して、屢〻幕府に建白しければ、幕府亦彼が才を知りて頗る信賴する所あり。兼ねて鐵砲方及び勘定吟味役格に補して、外使應接・大砲鑄造・砲臺建築等の事に當らしむ。品川の七砲臺の如き、亦坦庵等が



江川坦庵　反射爐

命を受けて築造せし所なり。

坦庵が韮山に開きし大砲鑄造所は、後江戸に移され、遂に發達して今の小石川砲兵工廠となれり。始めて耐火煉瓦を製して反射爐三個を建設したるが、其の遺趾現に存す。又米飯の軍陣に不便なるを思ひ、

自ら麵包を燒きて、銃獵の際など之を用ひたり。凡そ是等の事、當時師傅あるにあらざれば、或は蘭書に就いて飜譯し、或は人を長崎に派して蘭人に問はしめ、其の他はすべて實驗に依つて研究したり。されば日夕文武の政務繁劇の間に在りて、寢食を省きて工場に入り、或は自ら鎔鐵を試み、或は自ら炭火を焚く等、工夫も尙及ばざるの辛苦を嘗めたり。

坦庵創始の才ありて意匠に富めり。されば大砲・兵器に就いても發明改良する所少からず。又我が兵士の兜帽の不便なるを憂へて、韮山笠を創造し、袴と

股引とを折衷して、一種の半ズボンを新案せり。然るに其の便利なるを以て、忽ち全國各藩に模倣採用せられたり。兵役の制度に就いても、夙に農兵の法を立て、特に軍隊教練の術に關しては攻究創定した る事少からず。今猶存する「附けー劍。」「肩へー筒。」「廻れー右。」等の號令の語式は、概ね坦庵の立案に基づけりといふ。其の他種痘の如き、寫眞術の如き、歐洲近世文明の事物、殆ど試みざるはなし。門生・眷屬事を命ぜられて、「我能はず。」といふものあれば、坦庵甚だ懌ばず。毎に之を誡めて曰く、「珍羞・美味も食はざれば、其

の味を知らず。未だ其の事を試みずして、焉んぞ其の成らざるを知らんや。凡そ事業の成否は、勉・不勉にありて、巧拙にあらず。人一度にして之を能くせば、己之を百度し、人十度すれば、己千度し、苟も勉強だにせば、拙は拙として終には成らん。何ぞ自ら限るべけんや。予は馬にも乘り、鐵砲も擊ち、槍も劍も、遣ひ、詩文・書畫・和歌・琴碁、敢て尋常人に劣らざる心得なり。されども是皆生れながらにして知れるにあらず、實に日夕苦心して漸く至れるなり。」と。

（續日本自助論）

二二　青葉の笛

大町桂月

熊谷直實一騎、浪打際に出でて、沖を見わたすに、船に追ひつかむとする一騎あり。練貫に鶴縫ひたる直垂に、萠黄匂の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ金作の太刀をはき、廿四指したる截生の箭負ひ、滋籐の弓もち、連錢蘆毛なる馬に、金覆輪の鞍置いて乘りたり。定めしよき大將なるべし。うちとらばやとて扇をあげて呼びもどす。

その武者けなげにも、戻り來りて、太刀ぬきて鬪へり。

終にくみうちて、共に浪打際に落ちたり。二三度上になり、下になりしが、熊谷の力やまさりけむ、下にくみ伏せて、首かゝむとて、其の顏を見れば、十五六歳の美少年なり。薄化粧して、鐵漿くろ〴〵とつけたり。あはれ、かく貴く美はしき少年の、いづくにか双のあてらるべき。熊谷、刀もちたるまゝにて、斬らむともせず。

「名乘らせ給へ。」

「名乘るも用なし。たゞ速に首をはねよ。」

「否々、ぜひに。」

「名乘らば、勸賞をうくるに、たよりよからむにや。さらば名乘らむ。我こそは修理大夫平經盛が末子、無官の大夫敦盛、生年十六歳なり。」

「さては、我が子の直家と同年なるか。子のいとしさは、人もわれも異ることなし。」

熊谷は心ひるみぬ。げにや、武夫は物のあはれを知る。直實は敦盛の我が子と同年なるを聞きて、わが子のことを思ひ出せり。今朝ともに西門に向ひしが、そのまゝにて、未だ相逢はず。無事なるか、うたれけるか。このやうに敵にくみしかれたるか。わが

子を思ふにつけて、敦盛の父經盛の心を思ひやり、如何にかして助けばやと思へど、今は源氏の軍、海陸に充滿して、のがさむとても、のがすべからざれば、止むを得ず、花の敦盛の首うち落せり。

敦盛の首塚

その鎧を檢せしに、笛一つありたり。これ名高き青葉の笛なり。今朝西門に向ひし時、笛の聲を聞きて感に堪へざりしが、さてはこの君の吹きたまひしものなるか。笛はもとのまゝにて、一世の名笛なれど、またこれを吹かむ人なし。首と笛とを手にせる關東一の荒武者、濱邊に佇立して、無常の涙せきあへざりしこそあはれなれ。

この戰や、源氏の大將義經は、二十三四歳の若武者なり。鵯越の案内者たる經春は、十七歳の少年なり。梅花を箙にさして奮鬪せし景季も少年なり。敦盛は十六歳なり。熊谷の子直家も同年なり。歸り鬪ひて、父知盛をして遁るゝを得しめたる平知章も敦

盛と同じ年輩なり。若武者の働、一に花々しかりしかな。（桂月學生文範）

二三　うれしさ

幸田露伴

夜は更けたり、あたりは靜かなり。音するものは庭の落葉の風に舞ひ狂ひて、かさ〳〵と鳴るのみなり。獨り火桶をいだきて、燈の下にうづくまりながら、思ふとも無しに、さまざまの事をおもふ。

雨降らんとする空のいと暗き夕、寒風に吹送られながら、長々しき路をつくして、やう〳〵吾が家の門を望み得るあたりまで歸りつきたる時、尾をふりふり狗の馳出で、悅び迎へたる、狗もまことに嬉しかるべく、主もまことにうれしかるべし。

憂しとも思ひ、辛しとも思ひながら、その事を爲しはてたる後、浴みしたる時の嬉しさ。

久しく讀まざりし書をひき出して、心ゆるやかに見る折から、情深かりし人の文の挾まり居たるに眼とまりて、十年ほどの昔を今に繰返し見たる嬉しさ。

蟲のためにいたく衰へたる樹を、枝など截りつめていかさんものと念じたるに、多く芽をふき出して、勢

よくなりたるを見たる嬉しさ。

長き病のやうやく癒えたる時、縁端近くゐざり出で て、久しく見ざりし庭の面を見、天の色を見たる嬉し さ。

親しき友の子・孫などの、美しう、賢う生ひたち行くを見る嬉しさ。

むくつけき人の、思のほかに親にはいとやさしう仕ふるよし聞きたる嬉しさ。

みづから種子を下し、たる草の初花咲きたる嬉しさ。

雪の夜の淋しきに、雪の日の旅のをかしかりし往時など思ひ出でながら、ぬるき茶を呑み呑み、句を案じ得し嬉しさ。

自ら克たんとはおもひながら、慾の抑へがたさに、克つあたはで歳月經たることを、一日遂に思ひきりて、危き戰に勝ちたる心地したる嬉しさ。

自ら箒執りて清らかに庭掃きたる後、直ちに落葉の一ひら二ひら、落霜紅の一顆・二顆落散りたるを見ては、さすがに惱ましくおもふを免れざりしが、心をかへて觀れば、地に箒目のあるがために、葉の散れるも、實の散れるも趣をなして、をかしとも思ひなされし

嬉しさ。

將棊さしなどして、勝つこと難きには定まれるものから、尙負けじ魂に、思を苦しめて打案じたる末、常の我には立ちまさりたるよき謀を思ひつき得て、遂に勝ちたるいと嬉し。「負けたれど、今のやうなるおもしろき謀にかけられたるなれば、口惜しからず。」など敵に云はれたるいよ〳〵嬉し。

七つ八つばかりなる美しき兒に「をぢさん、をぢさん。」といひて親しまれたる嬉しさ。

一月一日、父母・兄弟・姉妹・妻子みなうちそろひたるうれしさ。（長語）

二四　學問の趣味

澤柳政太郎

藝術を賞翫することは、素より專門家に限つたことではない、むしろ其の賞翫は一般素人のことである。深く學問を研究して、其の蘊奥を極めることは、固より學者に屬することであるが、趣味として之を賞翫するは、同じく一般素人の事である。然るに日本人は書畫・骨董を愛玩する心はなか〳〵深いものであるが、學問に對する趣味はあまり多くない。西洋人

は固より各種の美術を愛翫するが、又學問に對しても頗る深い興味を持つてゐる。或は實業家にして博物學に趣味を有して、立派な著述をするものもあるし、或は外交官にして歷史・地理・言語・博物等に興味を有して、其の任地に於ける是等の事項を研究し、本國に歸つては其等に關する一廉のオーソリティ*となるものも少くはない。之に反して、日本人の間には、專門の學者以外に學術的の研究をなしつゝあるものは殆どないといつてもよい。もし專門の業務以外に、多少の趣味ありといふならば、夫は書畫・骨董・

authority

音樂等、藝術上の趣味に限られて居る。

專門家にあらずして學問を樂しむといふが如きは、一種の道樂に過ぎないのであるから、此の道樂がないからと云つて、固より咎め立てをすることは出來ない。然しながら斯かる道樂は誠にあつて欲しいものと思ふし、また此の種の道樂がない結果として、日本の學問の進歩に影響を及す事がないとは云へない。素人に學問を賞翫する風があると、自ら學者の事業を諒解し、之に對する同情が湧出る。大美術家が世に出たり、美術が盛になつたりするのは、之を

保護したり賞翫したりする者の多いのに因るので、學問を樂しむ者が世間に多ければ、それだけ學問の進歩を促す事になる。日本に於ける學問の進歩の顯著でないのは、單に學者の努力が足らない許りでなく、素人の間に學問を樂しむ風がないのに因ると思ふ。近年我が美術の發達せるは、相當の保護者が出て來た事に因るのであつて、而も其の保護者は之を美術の賞翫者の間に見出すのである。學問の賞翫者が多くなつて、之を保護する樣になつたならば、其の進歩には著しいものがあるであらう。

學問の進歩は學科によつては、設備・機械等に關係あるが爲に費用を要することが多い。若し篤學の學者を保護するものがあれば、其の學問の進歩を促すことが頗る大なるものである。西洋には美術家を保護する者があると同時に、學者を保護するものが少くない。かくて彼に於ては學問は益〻進歩する。されば學問を賞翫するといふ道樂は、其の影響する所、頗る大いなるものがあると云へる。

學問を樂しむ風のないのは、單に學問の進歩のために遺憾であるのみならず、社會の風尚を高める上に

も殘念な事である。我が社會に幾多道德・風紀上の缺點あるが如き、茲に原因が伏在する。又前に述べた實際家にして著述をなすものゝないといふが如き、實は學問に趣味を有せざる所より起る。夫等の人は長く實地の業に從事して居つても、只年々歲々同一の事を繰返して、其の間に知らず識らず熟練を積むと云ふまでであつて、或は考へたり或は書物に諮つたり、或は又分らぬ事を人に尋ねたりすることをしない。夫故に學問に趣味のない人は、何年同じ事をして居つても、進歩・發達の機會を捉へ得ない。

即ち學問鑑賞の習慣なきは、啻に他人を益せざるのみならず、自身も損する所が少くないといはねばならぬ。（隨感隨想）

二五　明倫の歌

後醍醐天皇

君臣

世をさまり民やすかれと祈るこそ
我が身に盡きぬ思なりけれ

同

左大臣橘宿禰諸兄*

葎はふいやしき宿も大君の

*橘諸兄　元明・元正・聖武・孝謙四朝に歷仕す。

まさむと知らば玉敷かましを　　兼輔朝臣

父子

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道に惑ひぬるかな　　大江千里

同

秋の日は山の端近し暮れぬ間に
母にみえなむ歩め我が駒　　伊藤維禎

夫婦

綠子を見れば涙の數そひて
ありしむかしぞいとど戀しき

兼輔朝臣　姓藤原、醍醐天皇頃の歌人。

大江千里　醍醐天皇頃の歌人。

伊藤維禎　號は仁齋、元祿頃の儒者。

兄弟

埋火のあたりのどかにはらからの
まとゐせし夜ぞ戀しかりける　　少將源定信

朋友

世の中に嬉しきものは思ふどち
花見てくらす心なりけり　　平兼盛

神祇

天つ神國つ社を齋ひてぞ
我が葦原の國はをさまる　　後宇多天皇

同

源定信　白河城主松平樂翁。

平兼盛　一條天皇頃の歌人。

橘千蔭　德川十一代將軍頃の歌人。

天の原よさしまつれる日の御神
てらさむ限り國は動かじ　　平宣長

文
をりくに遊ぶ暇はある人の
いとまなしとてふみ讀まぬかな　　太田持資

武
かゝる時さこそ命のをしからめ
かねてなき身と思ひ知らずば　　森迫親正

同
命より名こそをしけれ武士の
道にかふべき道しなければ　　（明倫歌集）

平宣長　本居氏、國學者四大人の一人。德川十一代將軍頃の人。

太田持資　號は道灌、戰國時代の武人。

森迫親正　大友義鎭の家來、戰死せる時十七歳

二六　臺灣より

乃木希典

貴翰拜誦。愈、御多祥の段奉欣賀候。私儀も不相變頑健にて、少しく同僚の迷惑氣の毒なる位に御座候、御安心可被下候。御垂示の兩章、感吟敬服仕候。當地も日中は中々苦熱を覺え候へども、朝夕は稍、秋氣を催し、山野も秋色の見るべき處有之候。

茲に臺灣城直東七十餘清里の處に熟蕃社有之、外國

熟蕃社　臺灣土着の人

宣教師其の外支那人村落よりも彼等の鎭壓を請ふ訴願有之、餘程の猛惡種族と相考へ、わが兵其の近傍迄參り候處、彼等は大得意にて出來り、舊六月頃已に臺灣の日本領となりて日本軍の來るを知り、二百年來怨恨ある支那人を驅逐するはこの時なりと申し合せたる由、彼此の實跡を徵するに、信ずべき廉も有之候。抑、彼等四社一團は、乾隆以來屢、支那官兵を擊退したる勇猛の名高く、その邊近村にては最も畏懼する處に有之候。此の酋長其の下の社長四人呼寄せ面會仕候處、その勇壯・質樸甚だ愛すべき者にて、夫

民を蕃族と稱し、之を生蕃、熟蕃の二種に別つ。

舊六月頃云々　明治二十八年四月十七日日清講和條約成る。

二百年來云々　清朝聖祖の康熙二十二年（皇紀二三四三）臺灣は清朝の版圖に入る。

乾隆　清の高宗の時の年號（皇紀二三九六―二四五五）

夫申し聞け、今後は支那人と雖も敵視せず、日本國のため力を盡し、皇室を尊敬し信義を守るべく誓約し、歸社致させ候處、又々此の度は禮物と唱へ、牛・鷄、其の他豹皮、寄木の板、鹿肉・奇鳥・奇獸を荷ひ、多人數故度々御馳走に相成りては御氣の毒とて各、米を負ひ、途中支那人の部落を通過する故、二十挺の銃と數十の槍とを持ち、總勢百四十餘人出掛けて參り候故、返禮旁、鹽を與へ候處、久しく之を得ざる事とて、何よりの喜び至極面白く、以前酋長にその地方より十三四の男子を選び差出し候はば、我等召し使ひ日本語を教へ

度と申聞置候處、早速に承諾し、彼の嫡子十五歳なるを此の度連れ來り、其の外にも一人志願者あり、その儘留め置き養育中に有之候。甚だ恐入候へども、錦繪買入れ候樣留守宅へ申し遣し置き候處、選定むづかしく被存候間御指圖相願度、右は例の土人等に日本本土の事を知らしむる爲にと存候へども、風敎に益なきものにては面白からず、各種取雜ぜにて五六十枚御指示奉願候。又々一兩日中土蕃人二十餘名面會に參り候約束有之、相樂しみ居り申候。右御願旁、如此に候。草々頓首。（乃木院長記念錄）

Boulogne　Napoleon　Trafalgar

二七　トラファルガルの海戰その一

小笠原長生

ナポレオン一世、身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨するや、列國の群雄皆震慴屏息してその部下に屬せしが、ひとり英國のみは孤立を守りてあへて屈せず、その島國たるを利用して優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りてしばしば佛軍を惱ましたり。こゝに於てナポレオンは畢生の力を盡し、雄兵十五萬をブー

Cadiz　Nelson

ローニゥに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮べ、まづ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、その虚に乘じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峽を一躍して英國を粉碎せんとせり。

英國の海軍提督ネルソン*は、豫てよりナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以ておのれの天職なりと確信し居たりしが、今ナポレオン大擧して英國を侵略せんとすと聞き、「佛帝たとひ鬼神の術ありとも、その海岸を距る一海里の外に出でしめじ。」といひて、直ちに敵の艦隊を追尾してカディズ*港の

Villeneuve　Collingwood

西暦千八百五年日本の光格天皇の御代。

附近にいたりぬ。時に佛國の提督ビール*ヌーブ西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して英國艦隊と戰ふ用意をなせり。ネルソンこれを悟り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みてトラファルガル岬の邊に達し、遂に敵の隊と相會す。時に西暦一千八百五年十月二十一日なり。

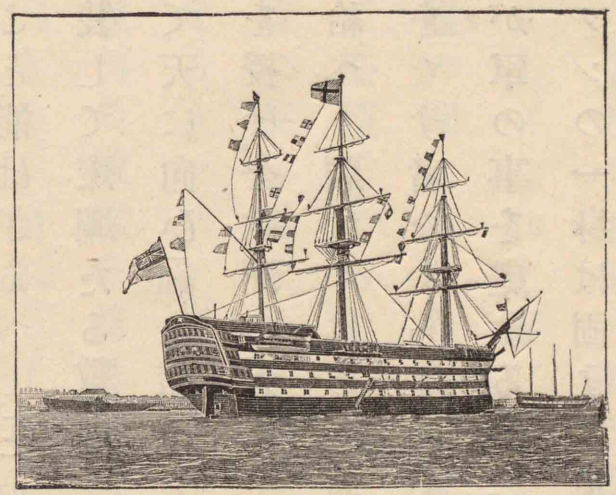
ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總艦隊を分ちて二隊の縱陣とし、副提督コリングウード*をしてその一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべきを

Victory
Blackwood

命じ、みづからは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突貫してまづその一部を擊破せんとせしが、佛將ビールヌーブこれを察し、その艦隊を二列に排布し、前隊各艦の間にあたる點に後隊の各艦を列せしめ、相依りて空隙なからしめぬ。

時に英國艦隊の旗艦ビクトリー*號の上甲板に佇立せるネルソン、側なるブラックウード*を顧みて、「君は幾何の敵艦を捕獲せば、わが勝戰なることを是認すべきか。」と問ふ。ブラックウード「十五隻を捕獲せば、以て偉功となすに足らん。」と答ふ。ネルソン頭を振り「否、われは二十隻を捕獲するにあらずば、滿足すること能はざるべし。」といふ。やがてその室に赴き、正裝して燦爛たる數箇の勳章を胸間に懸け、肅然として天に向ひ、「神よ、願はくは、わが英國に赫々たる大勝を授け、全歐洲の人民をその塗炭の苦しみより救ひ給へ。願はくは、わが將卒をして一人も卑怯の擧動をなす者なからしめ給へ。併せ願はくは、戰勝後我が軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身は固より惜しむに足らず。ただわが忠誠を憐みて擁護を垂れ給へ。」と禱りて、やがて甲板に

出でたるに、敵艦いよ〳〵近づく。英軍の意氣ますます壯なり。ネルソンまたブラックウードを顧みて、「なほ一信號旗の掲げざるべからざるものあり。」とて、直ちに信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。その信號は、「英國は各自がその本分を盡さんことを期待す。」といふことなり。英國總艦隊之を望みて狂



信號を掲げたる旗艦

喜措くこと能はず、拍手・喝采の聲、海波もために震はんとす。ネルソン莞爾として、「今ははや準備に於て遺憾なし。餘はただ神とわが正義とを賴まんのみ。」といひしが、やがて、「接戰せよ。」との信號旗は檣頭高く掲げられたり。

旗艦ビクトリー號、前驅率先して進みしが、着彈距離に達するや、數隻の敵艦これに向ひて砲擊を始め、飛彈こもごもネルソンの頭上に轟く。ブラックウードその本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつゝ、「余はまた速かに本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せ

る閣下の壯貌を拜すべし。」といへば、ネルソン、「われは既に國家の爲に一身を犧牲にせんとせり、再び相語ることを期せず。」といふ。意氣軒昂、爽快の色その眉宇の間に溢れたり。

二八　トラファルガルの海戰　その二

時に副提督コリングウードの旗艦ロ*ーヤルサベレーン號は、その艦隊の先登に立ち、健帆風を孕みて西班牙の戰艦サ*ンタアンナ號に向ひて進みしが、その艦尾に達するや、二彈を重塡せる左舷の大砲を一齊

Santa Anna　Royal Sovereign

に發射し、忽ちこれを擊破せり。ネルソン遙かにこれを望み、欣然として左右を顧み、「好丈夫の意氣を見よ。猛烈鬼神の如し。」といふ。既にして佛の諸艦、皆ビクトリー號を目蒐けて進み來りしかば、飛彈實に急雨の如く、艦體破壞し、索具斷絶し、兵士の戰死するもの頗る多し。然れどもなほ堅く忍びて一發も應砲せず。ます〳〵進みて佛の提督ビールヌーブの旗艦をもとむ。ビールヌーブこれを避けんが爲、殊更に將旗を掲げざりしかど、ネルソンその陣形によりて、旗艦の第二位にあること、を看破し、猛然これに

Redoutable

薄り、まづ艦窓に向ひて小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三彈を重塡せる左舷の大砲を一時に發射せり。波濤驚き、雲霧裂け、その音百雷の一時に落つるがごとく、敵兵四百、算を亂して殪れ、二十門の巨礮毀損し、艦體大破して、また用ふること能はざるに至れり。

こゝにネルソンいよ〳〵奮戰して進み、右舷の諸砲を以て別に敵艦レヴータブル號を砲撃しつゝ、遂にこれに衝突せり。この時に當り、英の諸艦長各、猛進して佛艦と接戰し、兩軍の戰正に酣にして、奮鬪殆ど

Hardy

一時閒ならんとするをりしも、レヴータブル號の檣樓より一發の銃丸飛來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて之を倒したり。衆駭きて相集り、直ちにネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーディーを見て、「佛奴われを狙撃し、彈丸わが脊髓を貫けり。恐らくは復起つ能はざるべし。」といふ。かくてネルソンはわが負傷の一事、いたづらに兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐かに手巾をいだし、わが面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室に入りぬ。時にレヴータブル號の兵士、艦上に襲撃隊を組みて、

將に突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射してこれを却け、なほ大小砲を連發してその過半を殪しゝかば、彼等は力つきて遂に降伏せしが、續いて敵艦のその旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず。ビクトリー號の兵士、拍手・歡呼して、

ネルソンの負傷

聲、雷の如し。ネルソン治療室にありてこれを聞き、思はず微笑せり。

ハーヂーたまゝ〳〵ネルソンの側に來り、「捕獲の敵艦十二隻に下らず。」といへるに、ネルソン「わが艦の敵に降れるものなきか。」と問ふ。ハーヂー聲に應じて、「一隻もなし。」と答ふ。ハーヂーやがて甲板に上り、一時間を經ずして再び訪來れるに、ネルソンその艦隊をして投錨せしめんとの念切なりしかば、これをハーヂーに命ず。ハーヂー、「艦隊の運動は副提督コリングウードの指導に任せ給へ。」といひしに、ネルソン頭

を振り、「苟もわが殘喘なほ存する間は、何ぞ指導の權を他人に委せん。」といふ。既にして薄暮に至り、佛・西兩國の聯合艦隊大敗して、砲聲全く收り、ネルソンの氣息も亦奄々たり。左右口をその耳朶にあて、「全勝わが軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり。」と報ぜしに、ネルソン莞爾として、遂に瞑せり。（帝國海軍史論）

大正國語讀本（修正版）卷三終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十二日修正再版發行
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
全拾冊
定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍
發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店